

令和6年2月27日

釜石市議会議長 千葉 榮 様

会派名 創政会  
報告者 井筒 健太郎

## 会派視察報告書

会派視察研修を令和6年2月5日、2月6日、2月7日、茨城県鹿嶋市、ひたちなか市及び東海村で下記の通り実施しましたので、ご報告致します。

### 1. 視察項目：スポーツを中心にした鹿嶋市のまちづくりについて

日 時 令和6年2月5日（月）15時～16時30分

場 所 鹿嶋市庁舎 会議室

参加者 古川愛明、磯崎翔太、菊地広隆、井筒健太郎

相手方 鹿嶋市議会議長 内田政文

鹿嶋市議会事務局長 清宮博史

〃 主事 宮本将人

鹿嶋市政策推進課 課長 藤松研

〃 主事 吉田優作

### 研修内容

#### ・視察先に選んだ理由

鉄と魚とラグビーのまちとして発展してきた釜石と同様に、鹿嶋市も鉄とサッカーの町として発展してきた。今後の釜石のラグビーのまちとしての発展とスタジアムの活用方法などを学び、スポーツ振興を通じたまちづくりの先進的な取組を釜石でも取り入れることができないか考察するため鹿嶋市を選定した。

#### ・視察経過

##### ●サッカーのまちになった経緯とその歴史について

鹿島地域（鹿島町・神栖村・波崎町）は以前、半農半漁の貧しい陸の孤島と呼ばれた場所であったが、1960年代に鹿島臨海工業地帯造成計画により、様々な企業が鹿嶋市内で操業を開始するとともに、鹿嶋市へ移り住む人が増加した。しかしながら、工業地帯化したものの、元々農村や漁村であり、旧住民（工業地帯造成のために、住み慣れた土地を手放

したことによりライフスタイルが激変した住民）と新住民（首都圏や関西圏から流入してきた企業社員やその家族）との間で軋轢が生まれ、うまくまちづくりが進まなかった。

そうした中、平成元年に日本サッカー協会によるプロサッカーリーグ構想が打ち出され、鹿嶋市にある住友金属の蹴球団に参加の打診があった。そして、旧住民と新住民をはじめ、企業、行政が一体となって地域活性化のため「鹿嶋からプロサッカーチームを送り出そう」と平成2年6月に住友金属サッカーチームのプロ正式参加表明することになった。

しかしながら、日本サッカー協会は、以下3点の問題点を挙げ、99.9999%不可能という反応だった。

- ①他チームに比べホームタウンとなる地域の人口が少ない。
- ②当時2部リーグに所属しており、プロでやれるほどの実力がなく、スタープレイヤーがいない。
- ③スタジアムが無い。

そこで、課題解決として以下の3つを行った。

- ①鹿嶋近隣町村の鹿嶋町・大野村・神栖町・波崎町・潮来町が一体となってホームタウンとなることを表明
- ②ブラジルサッカーのスーパースターのジーコ氏を招へい
- ③茨城県サッカー協会・近隣町村長・地元企業から何度も茨城県へ要請書を提出し、その結果県知事が「日本初の屋根付き専用スタジアムを建設する」ことを表明

以上の3つの問題点を解決し、住民・地元企業・行政が一丸となった地域ぐるみの努力により平成3年2月14日にJリーグへの正式参加が認められることとなった。

#### ●鹿嶋市のスポーツ振興への取組

鹿嶋アントラーズと鹿嶋市について以下の6つの協同事業を行っている

- ①選手による学校訪問
- ②小中学生の全校応援
- ③ホームタウン協議会の設立とPR・交流事業
- ④ホームタウンイベントをスタジアムで開催（かしままつり・サッカーフェス・ビアガーデン等）
- ⑤鹿嶋市総合計画審議会委員委嘱
- ⑥アントラーズホームタウンDMO

#### ・所感

釜石市はV7時代に多くの新日鉄社員の応援の下、ラグビーのまち釜石として発展してきたが、現在はその多くの社員や家族が釜石を離れ、一部のラグビーファンの応援に留まっている。

しかしながら、釜石にはワールドカップを開催したスタジアムもあり、近隣市町村や東

北のどこにもないラグビーのレガシーがある。これをまちづくりに活用しないのは宝の持ち腐れになってしまう。

鹿島のサッカーのまちとしての発展の歴史を参考に、釜石でも近隣市町村との広域連携を視野に、また市民・企業・行政が一体となって地元チームを支える環境づくりを行うことが必要だと感じた。

さらに地元の釜石シーウェイブスと地域住民とのさらなる交流も不可欠で、鹿嶋市のスポーツ振興の取組や、鹿島アントラーズのチームとしての地域貢献について等、釜石シーウェイブスの事務局をはじめ関係団体にもこの度の視察研修の内容を共有することが必要であると考えている。



## 2. 視察項目：ひたちなか港の活用について

日 時 令和6年2月6日（火）13時30分～15時

場 所 東海村及びひたちなか市（株式会社茨城ポートオーソリティ）

参加者 古川愛明、磯崎翔太、菊地広隆、井筒健太郎

相手方	株式会社茨城ポートオーソリティ	企画・港湾振興課長	黒澤陸
	〃	企画・都市事業課長	川崎昌洋
	〃	企画・都市事業課 係長	小林寛

### ・視察先に選んだ理由

釜石港へ大阪府から寄贈されたガントリークレーンを活用し、今後釜石港のコンテナ流通の増加や新たなコンテナ航路開設に大きな期待が寄せられている。そこで、茨城港（日立港区・常陸那珂港区・大洗港区）の港湾の歴史と流通について学び、釜石での今後の港湾振興に事例活用できないかを探るため選定した。

### ・視察経過

#### ●ひたちなか地区の歴史について

1973年に米軍から広大な敷地が日本に返還されたことにより、その土地を有効活用するため、「新全国総合開発計画」のもと港湾の開発が進められることになった。

京浜港のコンテナ輸送の飽和状態の問題を解決するために、茨城港（日立港区・常陸那珂港区・大洗港区）として開発が進んだ。

#### ●ひたちなか地区の開発について

ひたちなか地区は商業施設やアミューズメント施設からなる「都市ゾーン」、国営ひたちなか海浜公園を中心とした「レクリエーションゾーン」、常陸那珂工業団地がある「産業ゾーン」、常陸那珂港区がある「港湾ゾーン」の4つのゾーンで開発が現在も進んでいる。

さらに常陸那珂港区では、外国貿易を行う北ふ頭地区、北米向けのスバル車を輸出する中央ふ頭地区、埋め立て後企業誘致を目指す南ふ頭地区の3つの地区に分けられている。

中央ふ頭地区、南ふ頭地区の埋め立てについては、常陸那珂火力発電所から排出される石炭灰をベルトコンベアーで輸送し活用されている。

#### ●常陸那珂港区の取扱貨物量について

東南アジア向けの産業機械の輸出が好調であり、令和4年には1,636万トン。またコンテナ取扱量は、過去最高に迫る46,710TEUを記録し、航路開設以来20年で約15倍に増加している。

### ●常陸那珂港区の特徴について

立地は北関東自動車道の出入口と直結し、また水深12メートルの岸壁のため大型RORO船の対応が可能となっている。さらに日立建機やコマツといった産業機械メーカーが埋め立て地に工場を建築し、港から直接輸出している。

近年はクルーズ船の積極的な誘致も行っている。

### ・所感

常陸那珂工区の特徴として、埋め立てをするため沖に5kmの防潮堤を建設し、その静水域での大規模な埋め立てが特徴的であった。また、埋め立てには近隣の火力発電所から排出される石炭灰の処分場として活用されていた。

釜石も公共ふ頭を活用し、東日本大震災前は完成自動車の取り扱いを行っていた。完成自動車物流の復活及び大型RORO船の誘致に対し、常陸那珂港区を参考にした場合、公共ふ頭の大規模拡張が必要だと考えられる。釜石港は幸いにして水深が深く、湾口防波堤もあり内湾は静水域となり、埋め立てができれば大型RORO船の誘致も可能となる。北日本製鉄所の火力発電所から排出される石炭灰の活用や、埋め立て地を活用した企業誘致、ガントリークレーンの増設や、釜石自動車道の出入口の釜石港直結など、釜石港の港湾振興に向け、様々な課題が認識できたとともに、岩手県への要望の重要性が再認識できた。



